

イワナの里 蔦川

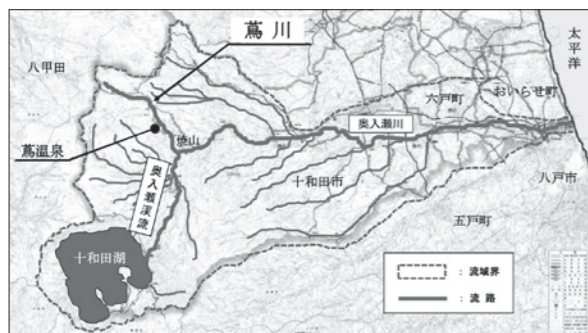
羽賀 義広

あおもりの川を愛する会 幹事
イワナグループ代表

はじめに

ふるさとの川を思うとき、私は大きい（川幅が広い）川のイメージがあまりない。

子供の頃は、大人と違って見る場所や範囲が狭く（むしろ狭い方を好む）、その目はいつも好奇心に満ちている。川の変化や虫、魚などの様子をまるで探検でもするかのようのぞき込む。ゾクゾクとした感覚がある。私は、かえって瀬や淵がたくさんある小さな川の方が懐かしい。蔦川は、そんな郷愁を誘う川なのである。この川のイメージは、ゴロゴロとしたたくさんの巨石の中を轟々と音を立てながら水が流れる。まさに、勇壮で生命力にあふれる清流である。また、蔦川を遡れば蔦温泉がある。蔦温泉は、久安三年（1147）にはすでに湯治小屋があったと文献に残る。この温泉は源泉の上に浴場がある無臭無色の単純泉で、昔から全国のリピーターが足繁く通う秘湯である。明治の紀行作家大町桂月は、十和田湖と奥入瀬そして蔦をことのほか愛し全国に紹介した。晩年は、こよなく愛した蔦温泉に居住し、現在は蔦温泉近くの墓に眠っている。



蔦川平面位置図

私も大町桂月に魅せられて蔦周辺を散策してみると温泉の周辺にブナの森を縫うような遊歩道（約3km）に出会う。この遊歩道を進むと蔦沼、鏡沼、月沼、長沼、菅沼、瓢箪沼が現れ、温泉を一周することができる。少し離れた赤沼を合わせ蔦の七沼と称される。荒々しくどっしり構えた蔦川、そして上流はブナの森林浴と清らかで静かな沼が楽しめる。何とも味わいの深い風景である。これが私の愛する川、蔦である。さて、蔦の由来は、木に絡むたくさんの「ツタウルシ」があること、または、この付近にワラビがたくさんとれて「ツタ」（アイヌ語でワラビのこと）と言われていたなどの説があるが、いずれにして

も、八甲田山系の豊かな自然に満ちた名前に違いない。

蔦川とは

蔦川は、奥入瀬川水系の左支川で、八甲田山系の大岳、小岳、高田大岳などの標高1,500m級の火山を水源として南東に流下し、濁沢、猿倉沢、矢櫃沢、大倉沢などを併せて十和田湖温泉郷の直上流の焼山地区で奥入瀬川本川と合流する。流域面積は、40km²、流路延長は10kmの火山砂防河川である。この川は、暴れ川であったため昭和29年からたびたび、砂防ダム等の整備が行われてきた。砂防施設や魚道の構造は、自然景観に対する配慮から表面を転石で覆い自然との調和を図るものになっている。しかしその後、経年とともに蔦川の浸食や土砂堆積等が進み段差が大きくなった魚道や河道の変化から川の滯筋と魚道が一致しない箇所が発生している。そのため現在では、床固工・

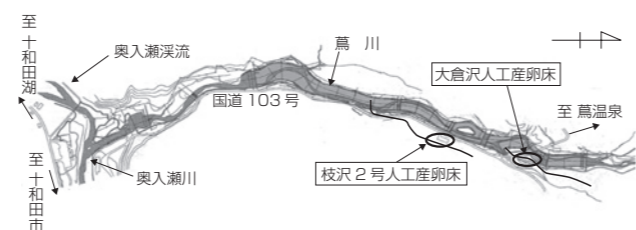
帯工等の魚道改良や魚類の生息状況・遡上状況の調査など、環境や景観に配慮した川づくりが行われている。



改良された床固めの魚道

イワナの人工産卵床を造ろう

あおもりの川を愛する会は、毎年、蔦川の清掃活動を9月第一土曜日に実施している。参加会員は清掃活動のほか、遊歩道や河川砂防施設、魚道について気づいた点や改善案などの自由な意見を出し合う。ある時、「イワナの生息を調べてイワナが住みやすい蔦川にできないだろうか」との意見が持ちあがり、それからこの取り組みが始まった。



蔦川平面模式図



人工産卵床での受精卵の調査

受精卵を発見

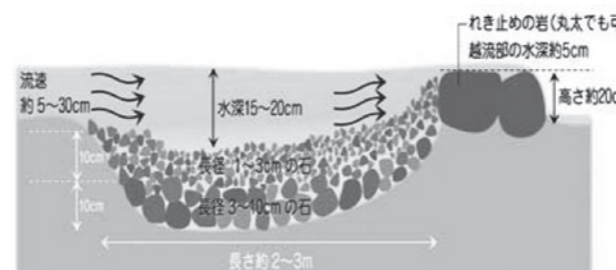
最初（平成18年）は、イワナの勉強会や川づくりの意見交換会、そして現地調査を行った。現地調査は、蔦川の下流区域とその枝沢で産卵しそうな箇所に水中メガネを使い、河床に沈んでいる落ち葉や砂礫などを丁寧に払いのけながら探してみると、本川と支川の2箇所で見つかった。イワナの自然繁殖を確認することができたのである。

この調査から、「人工産卵床を造ろう」という気運が盛り上がり、平成19年秋から毎年設置を行っている。現在の設置場所は、蔦川支川の枝沢2号と大倉沢の2箇所となっている。人工産卵床での産卵は、初年には確認できなかったが、翌年からは毎年確認されている。

産卵床、そしてイワナの日とは

イワナなどのサケやマス仲間、産卵の時に小石の下に卵を埋めて、卵が川の水に流されないように、そして他の魚に食べられないようにする。受精卵は、小石の下でふ化して春には稚魚となり泳ぎ出す。この卵から稚魚に成長する間は、水のほかに十分な酸素と栄養が必要となる。このうち栄養は、卵のうに蓄えられているが、酸素は川の水から取らなければならない。水から酸素を取るためには、小石の下に埋められている卵に、いつでもきれいな水が流れていることが必要である。人工産卵床は、この条件を人工的に造りあげ、産卵しやすい環境を整えるものである。

人工産卵床は、再設置を毎年行う。それは、台風など



イワナの人工産卵床を横から見た図

の大雨で産卵床が流されてしまうことや産卵床の上流から運ばれた砂や泥が堆積すると目詰まり状態になり卵が窒息してしまうからである。

私たちは10月7日を「イワナの日」と呼んでいる。それは、人工産卵床の設置日が天候や産卵の時期を考えると10月7日前後が望ましかった。そして何年か作業を続けていると、この日が「イワナ(107)」と読めることを偶然発見したのである。それから「イワナの日」は、人工産卵床の設置日となった。

イワナの里づくり

これまでの活動の中で印象的なことは、平成21年に河川整備基金助成事業の採択を受けて「イワナの里づくり体験学習」を行ったことである。地元十和田市立法奥小学校の4年生児童と教職員の方々が校外学習の一環としてこの事業に参加した。体験学習は、川に住む魚の勉強会（川の様子や魚の種類、イワナやアメマスの生態、産卵床の設置方法など）や、イワナの炭火焼きの試食体験、そして蔦川での人工産卵床の設置である。参加した児童の感想を紹介する。「ぼくが大人になった時、人間と自然が仲良くなれるように自然を守りたいと思います。イワナの里に来る人たちが『わあ、きれいだあ』と思える川にしていきたいです。」この体験学習は、イワナがふるさとの身近な魚であり、「きれいな川が命を育む源である」ことを学ぶよい機会になったと思う。



みんなで人工産卵床をつくりました

おわりに

この十和田湖、奥入瀬溪流、蔦川の一帯は、春夏秋冬それぞれの色彩と表情を見せながら日々変化をくり返して多くの人を魅了してきた。この素晴らしい自然を愛しイワナが住むきれいな川を守り育てる。そして、子供たちの心にいつまでも残る懐かしいふるさとの川となることを願うものである。

最後に、これまでご支援をいただいた多くの方々から感謝の意を表す次第である。